

巻頭言

情報知識学会誌の発刊にあたって

米田 幸夫[†]

情報知識学会が関係者の興望を担って、ささやかながらも賑々しく発足したのは、早くも2年半前の、1988年4月であった。当学会の「設立趣意書」に記され、その機関誌である「情報知識学会ニュースレター」の設立記念号にも各位の切実な期待が述べられているように、当学会の目的は情報知識学に関する学術、技術の進歩を計り、国際的な視野において会員や関係国際機関・学協会との連携を密にすることである。

これらを実現する手段のうち、学会の学術講演会は独自の開催に至るまでは、さしあたり当学会の設立母体の一つである日本学術会議の「情報学シンポジウム」の共催をおこなってきた。このシンポジウムの演題は情報知識学の対象とするものが多く、その意味でも当学会にとっても適切な行事であった。また、小論説、折々の学会の行事の予告や報告、関係する社会の動きなどは、上記の「情報知識学会ニュースレター」の発行によって会員に速報してきた。

しかしながら、学会としての最大の出版活動はいわゆる学会誌の刊行であろう。実は学会設立の直後に編集委員会を組織し、先ずニュースレターの編集・発行を行うとともに、学会誌の編集方針、投稿規定、査読体制と印刷・出版の方法をこの委員会で熱心に議論したものである。当学会の守備範囲は一般の学協会とはことなり、人文社会から自然科学全般にいたる広範な学問分野とそれに係わる技術にわたるものである。したがって、編集委員はこれらの分野を網羅した方々をお願いしたことはいうまでもない。編集方針、投稿規定、査読体制は学問分野毎にその分野の特性と永年の経験に基づいて独自のものが確立しているので、それらを互いに紹介し、単なる折衷案ではなく、当学会にふさわしいシステムとすることができたのである。また、投稿・編集・印刷方

式についても、こと＜情報知識＞というからには、その名にふさわしい新方式を採用したいとの声が高まった。投稿はペーパーレスの電子メールに限定するとの案も出たが、当面はフロッピー・ディスク郵送に落ち着いた。さて、編集・印刷は日本語の宿命というか、発足当時の大勢では＜情報知識＞とは裏腹に手工業的な方法にとどまっていたが、その頃導入された日本語 SGML*を凸版印刷(株)の協力で、おそらくは学会誌へ最初に使用することとなった。

このように、編集委員会は岩田修一(東京大学)、石塚英弘(図書館情報大学)、根岸正光(学術情報センター)の三氏を中核として学会誌の出版体制を整え、各方面の原稿を依頼し、ようやくのことで我々の学会誌の第1号が発刊されるにいたったのである。この間、学会の財政基盤・事務組織が不十分な中で、ここまでこぎ着けられたことは、三氏をはじめ、編集委員会の各位、凸版印刷(株)および事務方の「日制」の方々のご協力とご労苦に心からお礼を申し述べたい。

さて、発刊された第1号の内容はすべて時宜に叶った力作であるが、その対象が全ての学問分野に分布していることは当学会の目的に誠にふさわしいことといえよう。特に、人文科学関係の報文2報はそれぞれの専門分野の学会誌に掲載することがテーマあるいは手法の点で必ずしも容易では無かろうと推察されるので、情報知識学の＜情報＞の伝達に大いに寄与するものと自負したい。今後、各分野の会員の増強と共に、会員各位のご協力を得て、質・量ともにますます充実され、その使命とする、情報知識学の国内および国際的な振興と研究・開発の連携に貢献することを期待するものである。

(1990年10月)

[†]情報知識学会長、東海大学開発技術研究所教授、東京大学名誉教授

*Standard Generalized Mark-up Languageの略。電子出版や全文データベース作成の手法として欧米で注目されている手法であり、1986年にISO規格8879となった。